

森林吸収源インベントリ情報整備事業地域講習会・中部近畿ブロック

開催日：2014 年 8 月 4 日（月）

場 所：京都府京都市右京区京北細野町（調査地点コード 260200）

講 師：岡本（森林総研関西）、金子・阪田・志知（森林総研本所）、酒井(佳)（森林総研九州）

○概要

中部関西ブロックを担当する株式会社クリタスの担当者 6 名を対象に地域講習会を実施した。京都では前の週まで猛暑が続いており、クリタスには熱中症の対策を講じていたが、講習会当日は時折小雨の降る曇天だったため熱中症の心配は少なかった。最高気温は林内で 27 度と、この時期としては快適な状況の下で講習会を行うことができたのは幸運だった。

7 時 50 分頃に太秦天神川駅で京都駅周辺宿泊組をピックアップし、予定待ち合わせ時間 8 時半にやや遅れて集合場所である関西電力のゲート前に到着した。今回の調査地は、関西電力の敷地内で自動車の駐車場所に隣接しており、アプローチは非常に容易だった。植生は広葉樹二次林であり、一部の斜面と谷底には施設の敷設に伴う開削の影響が認められた。調査地内には傾斜が 30～40 度程度を示す斜面があったが、中央付近はなだらかな谷底であったため、調査にはそれほど支障がなかった。

8 時 45 分から事前説明を行い、調査を開始した。通常行っている調査体制に従って、現場スタッフを基本的に枯死木班 1 組（2 名）、土壌調査班 2 組（1 名ずつ）の 3 班に別れて調査を行ってもらった。それぞれの班に対して同数の講師が付き、1 名が全体を総括するような形で講習を進めた。調査地の杭は前日の下見の際に確認済みだったため直ちにライン設定を行った。見通しが良いため直ぐに設定が終わり、1 組がライン長測定・枯死木調査、2 組が土壌断面調査に分かれた。土壌断面の位置の決定に際しては、目測ではなく、ポール等を用いて厳密に行うよう指導した。土壌断面には中生界の丹波帯の砂岩由来の大きな礫が多く認められた。これらの礫は風化していたため、時間をかければ剪定ばさみで切断できたが、その分円筒を手早く採取することができず、手間がかかってしまった。とくに尾根の調査地点では、午後にかけて試料を採取することとなった。一方、ライン長測定と枯死木の調査は、担当者が手慣れており、無駄なく進められた。枯死木、根株とも数が多くなかったため、開始から 1 時間かからず終了した。分解度の判定と根株の計測については、調査を進めながら、これまでの調査事例などをあげて講師とやりとりしたため、意識の共有が計られたと思われる。調査が早く終了した枯死木班は残る 2 断面の荒堀を行った。12 時過ぎから各班の進み具合に応じて各自昼食をとった。

午後は、尾根の試料採取と谷底の 2 地点の土壌断面調査を行った。谷底上流部の調査地点は比較的最近に堆積した小礫を多く含む土層のため、試料が採取しやすく、早々に調査

が終了した。一方、下流部の地点は大きな礫を多く含んでいて、試料採取時には断面で見たときよりも多くの礫が認められた。このため、試料の採取に時間がかかり、3層目の採取はブロックサンプリングで実施した。全ての試料が採取し終わったのは16時頃であった。その後、埋め戻しを行い、車に戻って講習会の総評を行い、16時30分頃に解散した。

今回の調査で少し気になったのは、クリノメーターの使い方である。まず、不安定なものではなく、固定しやすい安定したものの上にクリノメーターを置く。その際、クリノメーターの「短辺」ではなく「長辺」を安定したものにあてた方が、正確に傾斜を測定できる。最後に内側の目盛りの数値で傾斜計の角度を読む。用具は正しく使用しないと、正確に測定できないので、正しい使い方を覚えるように指導を行った。



写真1. 調査地の様子。調査地内の中央に谷がある。施設整備のために樹木が伐採され、下草もほとんどないため、調査しやすかった。



写真2. 根株の測定。分解度の判定、根株計測のやり方について、実例を挙げながら講師と話して進めた。



写真3. 堆積有機物の採取。広葉樹類の落葉で採取しやすかった。



写真4. 尾根地点の土壌円筒の採取途中。風化した礫が多く、円筒試料、化学性試料の採取にかなり手間取った。